

滅つていった。戻つてきた艦も、傷つきドックから何ヶ月も出てこないなんて事はざらだ。

「新しい駆逐艦の娘が来れば、軽巡洋艦一隻と駆逐艦一隻。数は少ないけどこれで立派な水雷戦隊ですね」

まだ今は駆逐艦や軽巡洋艦しか居ないけれど、きつとそのうち重巡や、戦艦、空母の艦娘だつてやつてくるだろう。堂々たる大艦隊となつて、敵を打ち破る自分たち艦娘の姿を思い浮かべる。その傍らには、いつもでも彼——提督の姿がある。

「提督。練習艦あらため、最初の秘書艦、大井として。明日からの実戦、よろしくお願いしますね」

「ああ。こちらこそよろしく頼む。練習艦のお前を使つて得たこのデータ、役に立たせてもらうぞ」

あなたが大艦隊を率いるその日まで。この国を救うその日まで。最初の艦娘にして練習艦だった船として、何があるうと付き従います。

密やかな決意を胸に秘め、大井は提督へ一礼した。

そして、あの決意の日から、一年あまりが過ぎた。

自分と提督の二人きりでこの部屋ひとつから始めたこの鎮守府は、いまでは百隻以上の艦娘を有する一大勢力になった。

先日のケツコンに伴う飾り付けはすっかり取り払われ提督の執務室は殺風景ないつもの様子に戻っている。提督は定例の戦況報告と方針会議のために出張しているので、今は執務室に大井ひとりきりだ。

待機してばかりだった大井と北上は、ケツコンしてから再び出撃や演習に出るようになった。

執務室の窓を叩く雨の音をぼんやりと聞きながら、大井は秘書艦用の机の上で万年筆をもてあそぶ。ついさきほどまで大井は午前の演習の旗艦を務め、練度の低い巡洋艦や駆逐艦を率いて甲標的による長距離雷撃の威力を見せつけたところだった。

出張で不在の提督の代理として事務仕事があるので午後の演習の旗艦は北上に代わつてもらっている。

制空権が必要な海域には空母が優先されるが、そうでない所へはまた出撃するようになった。砲撃戦が始まる前にはほぼ確実に一隻は敵艦を沈めてくれる雷巡の長距離雷撃に期待する艦娘は多く、彼女たちは大井と北上の復帰を歓迎してくれた。

そして出撃や演習に出るようになると共に第一艦隊の旗艦——すなわち秘書艦の務めをこなすことも増えた。

伊達にこの鎮守府が設立されたときからずっと居るわけではない。単純に事務仕事が得意な艦娘は他にもいるが、鎮守府の内情を把握していることにかけては自分の右に出るものはいな